

第七章 神界旅行の四（一七）

神界の場面が、たちまち一変したと思えば、自分は又もとの大橋の袂に立っていた。どこからともなくにわかには被詞の音が聞えてくる。不思議なことだと思いつながら、二三丁辿って行くと、五十恰好の爺さんと四十かつこの婦とが背中合せに引着いて、どうしても離れられないで跳いてる。男は声をかぎりに天地金の神の御名を唱えているが、婦は一生懸命に合掌して稻荷を拜んでいる。男の合掌している天には、鼻の高い天狗が雲の中に現われて爺をさし招いている。婦のおがむ方をみれば、狐狸が一生懸命山の中より手招きしている。男が行こうとすると、婦の背中にびったりと自分の背中が吸いついて、行くことができない。婦もまた行こうとして身悶えすれども、例の背中が密着して進むことができない。一方へ二歩行つては後戻り、他方へ二歩行つては、又あともどりという調子で、たがいに信仰を異にして迷っている。自分はそのへ行つて、「惟神靈幸倍坐世」と神様にお願いで、祝詞を奏上した。そのとき私は、自分ながらも実に涼しい清らかな声が出たよ。うな気がした。

たちまち密着していた二人の身体は分離することを得た。彼らは大いに自分を徳として感謝の辞を述べ、どこまでも自分に従つて、

五十恰好の爺……後に出てくる「足」のこと。

四十かつこの婦……後に出てくる「黒」のこと。

『神界の御用を勤めさしていただきます』

と約束した。やがて男の方は肉体をもって、一度地の高天原に上って神業に参加しようとした。しかし彼は元来が強慾な性情である上、憑依せる天拘の霊が退散せぬため、ついには盤古大神の眷属となり、地の高天原の占領を企て、ために、霊は神譚を蒙りて地獄に墮ち、肉体は二年後に滅びてしまった。そうしてその婦は、今なお肉体を保って遠く神に従うている。

この瞬間、自分の目の前の光景は忽ち一転した。不思議にも自分はある小さな十字街頭に立っていた。そこへ前に見た八頭八尾の霊の憑いた男が俣を曳いてやって来て、

『高天原にお伴させていただきますから、どうかこの俣にお召し下さい』

という。しかし「自分は神界修行の身なれば、俣になど乗るわけにはゆかぬ」と強て断つた上、徒歩でテクテク西へ西へと歩んで行った。非常に峻峻な山坂を三つ四つ越えると、やがてまた広い清い河のほとりに到着した。河には澄きつた清澄な水が流れており、川縁には老松が翠々と並んでいる美に景勝の地であった。自分はこここそ神界である、こんな処に長らくいたいのものだという気がした。また一人とほとほと進んで行けば、とある小さい町に出た。左方を眺むれば小さな丘があり、山は紫にして河は帯のように流れ、蓮華台上と形容してよからうか、高天原の中心と称してよからうか、自分はしばしその風光に見惚れて、そこを立去るに躊躇した。

山を降つて少しく北に進んで行くと、小さな家が見つかった。自分は電気に吸着けらるごとく、忽ちその門口に着いていた。そこには不思議にも、かの幽庁にいられた大王が、若い婦の姿と化して自分を出迎え、やがて小さい居間へ案内された。自分はこの大王との再会を喜んで、いろいろの珍らしい話を聞いていると、にわかには虎が唸るような、また狼が呻くような声が聞こえてきた。よく耳を澄まして聞けば、天津祝詞や大袂の祝詞の声であつた。それらの声とともに四辺は次第に暗黒の度を増しきたり、密雲濛々と鎖して、日光もやがては全く見えなくなり、暴風にわかにかき起つて、家も倒れよ、地上のすべての物は吹き散れよとはかり凄じき光景となつた。その濛々たる黒雲の中より、「足」という古い顔の鬼が現われてきた。それには「黒」という古狐がついていて、下界を睥睨している。その時にわかにかに河水鳴りとどろき河中より大いなる竜体が現われ、またどこからともなく何とも形容のしがたい悪魔があらわれてきた。大王の居間も附近も、この時すっかり暗黒となつて、咫尺すら弁じがたき暗となり、かの優しい大王の姿もまた暗中に没してしまつた。ただ目に見ゆるは、烈風中に消えなむとして瞬いている一つのかすかな燈光ばかりである。自分は今こそ神を祈るべき時であると不図心付き、「天照大御神」と「産土神」をひたすら念じ、悠々として祝詞をすずやかな声で奏上した。一天にわかには晴れわたり、一点の雲翳すらなきにいたる。

祝詞はすべて神明の心を和げ、天地人の調和をきたす結構な神言である。しかしその言霊

「足」………元金光教の布教師足立正信氏のこと。

「黒」………足立正信氏と関係した黒田純のこと。竜女だともあります。

が円満清朗にして始めて一切の汚濁と邪悪を払拭することができるのである。悪魔の口より唱えらるる時はかえって世の中はますます混乱悪化するものである。蓋し悪魔の使用する言霊は世界を清める力なく、慾心、嫉妬、憎悪、羨望、憤怒などの悪念によつて濁っている結果、天地神明の御心を損うにいたるからである。それ故、日本は言霊の幸はう国とはいえども、身も魂も本当に清浄となった人が、その言霊を使つて始めて、世のなかを清めることができるのである。これに反して身魂の汚れた人が言霊を使えば、その言霊には一切の邪悪分子を含んでいるから、世の中はかえつて暗黒になるものである。

さて自分は八衢に帰つてみると、前刻の鬼、狐および大きな竜の悪霊は、自分を跡から追つてきた。「足」の鬼は、今度は多くの眷属を引連れ来たり、自分を八方より襲撃し、おのおの口中より噴霧のように幾十万本とも数えられぬほどの針を噴きかけた。しかし自分の身体は神明の加護を受けていた。あたかも鉄板のように針を弾ね返して少しの痛痒をも感じない。その有難さに感謝のため祝詞を奏げた。その声に、すべての悪魔は煙のごとく消滅して見えなくなった。

ここで一寸附言しておく。「足」の鬼というのは烏帽子直垂を着用して、あたかも神に仕えるような服装をしていた。しかし本来非常に猛悪な顔貌のだが、一見立派な容子に身を侷している。また河より昇れる竜は、たちまち美人に化けてしまった。この竜女は、竜宮界の大使命を受けているものであって、大神御経綸の世界改造運動に参加すべき身魂で

あつたが、美しい肉体の女に変じて「足」の鬼と肉体上の関係を結び神界の使命を台なしにしてしまった。竜女に変わったその肉体は、現在生き残つて河をへだてて神に仕えていゝる。彼女が竜女であるという証拠には、その太腿に竜の鱗が三枚もできてゐる。神界の摂理は三界に一貫し、必ずその報いが出てくるものであるから、神界の大使命を帯びたる竜女を犯すことは、神界としても現界としても、末代神の譴めを受けねばならぬ。「足」の鬼はその神罰により、その肉体の二子は聾となり、一女は顔一面に菊石を生じ、醜い竜の匍匐するよつな痕跡をとどめていた。さて一女まず死し、ついでその一子も滅んだ。かれは罪のために国常立尊に谷底に蹴落され胸骨を痛めた結果、靈肉ともに滅んでしまった。かくて「足」の肉体もついに大神の懲戒を蒙り、日に日に瘦衰え家計困難に陥り、肺結核を病んで悶死してしまつた。

以上の一男一女は「足」の前妻の子女であるが、竜女と「足」の鬼との間にも、一男が生れた。「足」の鬼は二人の子女を失つたので、彼は自分の後継者として、その男の子を立てようとする。竜女の方でも、自分の肉体の後継者としてしようとして焦つてゐる。一方竜女には敵格な父母があつた。彼らもその子を自分の家の相続者としてしようとして離さぬ。「足」の鬼の方は無理にこれを引とろうとして、一人の肉体を、二つに引きち切つて殺してしまつた。靈界でこうして引裂かれて死んだ子供は現界では、父につけば母にすまぬ、母につけば父にすまぬと、煩悶の結果、肺結核を病んで死んだのである。こうして「足」の鬼の方は靈

肉ともに一族断絶したが、竜女は今も後継者なしに寡婦の狐独な生活を送っている。

本来、竜女なるものは、海に極寒極熱の二千年を苦行し、山中にまた二千年、河にまた二千年を修業して、はじめて人間界に生れ出するものである。その竜体より人間に転生した最初の一生涯は、尼になるか、神に仕えるか、いずれにしても男女の交りを絶ち、聖浄な生活を送らねばならないのである。もしこの禁断を犯せば、三千年の苦行も水の沫となつて再び竜体に墮落する。従つて竜女というものは男子との交りを喜ばず、かつ美人であり、眼鋭く、身体のごとくに鱗の数片の痕跡を止めているものも偶にはある。かかる竜女に対して種々の人間界の情実、義理、人情等によつて、強て竜女を犯し、また犯さしめるならば、それらの人は竜神よりの恨をつけ、その復讐に会わずにはいられない。通例、竜女を犯す場合は、その夫婦の縁は決して安全に永続するものではなく、夫は大抵は天死し、女は幾度縁をかゆるとも、同じような悲劇を繰返し、犯したものは子孫末代まで、竜神の祟りを受けて苦しまねばならぬ。

(大正二〇・一〇・一九 旧九・一九 谷口正治録)